

まあ、私の勝手な放言をお許し願えれば、中国のあの大きな碑の題額や寺観、宮殿などの門聯・標柱石に奇抜な図案性の豊かな文字を見るが、やはりむかしにも今の私どもが考えることと共通するようなものがあつたらしいが、慣例になつていないもの、先例となつていないものは使えない。

それに模倣性の強いものはだめで、その国その民族独自のものであつてほしいと思うと、ちよつとやさつとのことではない。まあ漢字の歴史何千年というのに、その適切な例もないのに急にこんなことを考えてもどうにもならない。

全くどうにもならないが、まあ書道の展覧会などに行つて、作品の初めのところに冠冒という印をひとつ朱肉で捺してあるのを見ると、これはどういう意味かと一心もつともな解説は承知していても、これはやっぱり冒頭に飾りを附けたい気持ちもあつたんじやないかと考えたくなる。みずから反省してみても、私はやはり習慣的な飾りとして印を捺している。

書もだんだん新型のものが出てくる時代だから、同好の人々は何か日本的な新しいものを工夫下さると有り難い。そして国際性のあるものには、従来に見られなかつた美しい印を初めに捺してあるところから始まるなどどうだろうと随分考えてきたが、まず実行する勇氣がないんだから仕方ない次第である。

少し脱線してしまふが、まあ今、書道といえは、漢字・仮名と大別して、尾上柴舟先生の長いご提唱であつた調和体というのがひとつ加わつたくらいのもので、しかも中心をなしている出品はやはり漢字である。この出品している方々はみな日常生活の中で漢字ばかりで暮らしている人はひとりもないのに、作品となると漢字でなければ仮名だけ。実生活では調和体が最も多用されているが、どう

いうものか仮名まじり漢字は、まだ美術品の座に堂々と落ち着いていない。

そして仮名のサイズと漢字の調和が全くサイズの調和し切つていないものが少ない。だからむかしの漢字書きが仮名まじりとなると、片仮名を使つていたわけが判るような気がする。

柔軟性のある曲線で構成される平仮名が、サイズの平均化の楽な漢字と併用されるにはやはり少し無理があるのが当然らしい。漢字の先生は仮名をやや漢字化して調和させ、仮名の先生は漢字の線を仮名化させて名家の先生方はうまく書いておられるが、調和体そのものとしての標準というほどのものはまだ出来ていない。そこをうまくやつているから調和体というんだ——という人もいるが、呵々。

私もこの調和体は日常の国民生活と密着しているんだから、手習いといへば調和体から入るくらいにならないといけないと考え、小学校の教科書のスタイルに賛成もし、この書範の先生方も随分この規範に骨を折つておられる。これをそのまま昂めて行けば、そのまま美術品の座に飾られてもよいのだというくらいのものが出現すると、漢字と仮名と併書するための各々のサイズ、線質のおのずから標準が生まれてくるのではないかと思ひ、それがまた調和体が楽に習える手だてにもなるんじゃないかとも思つている。

こういうろんなことを列べてみると、現代の中に書がいろいろに使われ伝習されるための工夫が次々と湧いてくる。

余白がないので、いい及んでいないけれど、この漢字・仮名が横書きにされるための研究などはほとんどこれは——と思うほどのものに出会つていない。しかし、いづれ筆字の美をいうならば、この問題を見過ごしてはられないものだと思う。書道にも新しい息吹を——と希つてやまないものである。

〔書範〕、昭和五十六年十二月

〔筆間雑記〕中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。